埼玉育ちのグローバル人

川口発国連行き珍道中

第２回「ロンドン編」

天野　晟さん

埼玉県マスコット
「コバトン」

皆さんこんにちは。新年を祝うお菓子、ガレット・デ・ロワ（「公現祭」「フェーヴ」で検索）を食べながら第 2 回をお送りいたします。

（1）国際都市で芽生えた「アジア人」という感覚

さて、北京留学で多様性に触れ、グローバル人になれたつもりでいた私は、意気揚々とイギリス・ロンドンにある大学院に進学します。思えば学生時代、英語を学ぶ原動力は、パンク・ロックとハリーポッターでした。そんな憧れの地、勉強したい学問、レベルの高い教授陣、どんな素晴らしい生活が待っているのだろうと期待に胸を膨らませた私。
国際公法系の授業はアジア人またはノンネイティブが基本は私のみだったことで、開始早々盛大にカルチャーショックを受けます（多様性との遭遇、セカンドインパクトとでも名付けます）。

同級生に「Far East からわざわざ何しにイギリスへ？」と言われたり、他人の発言を遮って自分の意見を主張したり、夜はパーティ三昧（メリハリが凄い）、これまで関わることのなかったタイプのクラスメイトに圧倒され、心のドアが一瞬にして閉じた日のことを今も覚えています。
辛かったのは、まだまだ英語力が足らず、授業でも自分がどのように貢献できるか模索する日々が続き、それを共有できる仲間がいなかったことです。

この時、手を差し伸べてくれたのは中国とタイからの留学生でした。英語力もそうですが、「敢えて曖昧さを残す」文化や家族を大切にする感覚、余暇の過ごし方、食の好み等、中国に留学した際には全然違うと思っていた点も、ロンドンに来て、世界中の色々な慣習と触れた後には、むしろ類似点に見えました。この時、アジアの中の日本、自分はアジア人なんだ！という意識が芽生えました。そしてこれは、人種・民 族・宗教・ジェンダー等の文脈における公平性や多様性を考慮することの重要性を認識することに繋がりました。
辛い留学生活を支えてくれた同級生達とは今もたまに近況を報告しあっています。

同級生達と

（2）挫折と失敗

アジア人という意識が芽生えた時に、ようやく、自分の役割や話しやすい話題を見つけることができました。領土問題の議論で、フォークラ ンド紛

争については非常に詳しいイギリス人も、アジアにおける領土紛争に関する私の発言にはとても熱心に耳を傾けてくれました。
慣れてきた頃に 1 年のプログラムは終わり、いよいよ次は就職だ、というタイミングで最大の壁にぶつかります。応募した国連インターンにはことごとく落ち、YPP という若手向けの国連採用試験にも 2 回落ち、段々自分が何をしたいのか分からなくなりました。
「どうして国連でなければいけないのか」「自分が国連にどう貢献できるのか」という質問にうまく答えられなかった私の未熟さが当時の面接官達に見透かされていたのではないかと思います。
この挫折から自分が本当にやりたいことが何か考え直すこととなり、それを仕事にできたのは帰国から約 3 年後のことでした。

国際司法裁判所の前で

（3）大事なのは「何をしたいか」

第 1 回目で触れましたが、私はとても長い間「国連で働きたい」と思い続け、次第にこれが目的化してしまい、1 日も早く国連で働くために最短の道を通って、融通が利くキャリアを選ばなければ、という呪縛に囚われることとなりました。
本来はもっと広い視点から「自分が人生で成し遂げたいこと」を考え、それを実現する手段として国連があるのであれば、次に「自分が国連で何をしたいか」を考える必要があるのに、そのプロセスを疎かにしてしまいました。ロンドン生活とその後の経験から、自分の強み・弱みを知ることの大切さを実感したのでした。
最近有難いことに中高生とお話をさせていただく機会があるのですが、その際に私が必ずお伝えしていることは、好き・嫌い、得意・苦手等を通して、「自分という人間によく向き合ってほしい」、夢を叶えることが目的にならないように色んなことにチャレンジして、「自分の可能性を限定しないでほしい」、という 2 つです。

奨学生活動報告会にて当時の上田知事と